

8. 監督 - 1972年～73年 -

1972年

監督就任

坪井監督が突然辞任されることになり、急場のこととて、比較的自由のきく私のところへ後任監督の要請がきた。研究にそして教育に最も充実すべき34歳の助教授時代のことである。私の未熟さゆえに、選手達の力を発揮させることなく終わった助監督を辞任して以来、彼等に申し訳ないというおもいが残り、監督のあるべき姿も折りあるごとに頭の中に浮かんできていた。無意識のうちにも東大野球部を強くするにはどうすれば良いかを考えていたようである。東大野球部の発展と選手達のため、また自らの後悔の念を断ち切るため、この貴重な2年間を使うことを決心するのに時間はかからなかった。今回もまた国分教授の許可が不可欠であったのはいうまでもない。次期主将のご子息から東大野球部の窮状をお聞きになっていたらしく、あっさりと、2年間の条件で私のわがままを許して下さったのである。

チームの状態

東大紛争のあおりで、このチームには4年生がいなかった。最上級生が3年生であったとはいえ、彼らの入学以来2年間の通算成績は1勝40敗とひどいものであった。初めての練習を見て、これは勝つのが容易でないとすぐ気付かされた。前回とは大違いであった。3年生の早川聞多君と2年生の御手洗健治君の二人がそれまで登板していた投手であった。早川投手はコントロールも球威もいま一つであり、御手洗投手はコントロールが投手の水準に達していない。ブルペンで捕手をしていた、入部してまだあまり日が経っていない選手の方がむしろ投手に適しているように思えた。3人目の投手となる山本隆樹君である。投手の次に大事なポジションである捕手については、正捕手が卒業して誰もいない状況であった。一番肩の良い大沼二塁手に因果を含めて、捕手に転向してもらった。彼は1年の時からレギュラーの二塁手として活躍しており、チームの要となるべき選手であった。その彼にポジションの変更を強いるのは私にとっても辛いことであった。内野陣は体格も良く、肩の良い選手が揃っていた。しかし、ゴロを捕る時に膝が硬く、大事な時にエラーをする可能性が高いと私には思えた。外野陣は肩が弱いというよりほとんどボールを投げられないといってもよい選手が、それまで主軸として2人も試合に出ていたのである。この投手陣では、4点以上取らなければ勝つことは不可能と思えた。しかし、主軸打者を見ると、バットを振り切らないで、ミートするだけの打法であった。普通の練習ではとても長打を打つようになるとは思えなかった。

基本方針

選手全員を集めて、最初に私の基本方針を話した。そして、これは私の在任中2年間には変えないことを宣言した。気に入らなくとも、不運だと諦めるしかないことを悟らせるような話し方をしたはず

である。しかし、これらの方針は選手達に衝撃を与えたようであったが、直ちに理解して、もっともだと思った選手も相当数いたようである。

(1) リーグ戦に勝つことができるチームとなることを目標とする

その年に勝つことだけを目的とするのではなく、長期的な視野に立ってのことである(10年間続ければ、良い投手が入部してきた時には、優勝可能なチームとすることを私は夢見ていた。これ位の目標でなければ、真剣に努力する情熱がわからないからである)。このことは、実力が同じになった場合は、下級生を試合に使うことになることを意味する。昭和47年春の最初の試合におけるメンバーは、投手早川、捕手大沼、一塁国分、二塁高橋、三塁田村、遊撃塩沢、左翼土井、中堅喜多村、右翼坂谷内であった。全員が最上級生で占められていたのである。翌年春の開幕時には、三塁相川と2年生平尾が新しくレギュラーとなった。そして、秋の最終戦には、さらに二塁河野(3年)と捕手渋谷(2年)が新しくレギュラーとなっている。2年間で4人のレギュラーがその地位を奪われ、3人の下級生がレギュラーとなっている。彼らが次の時代の中心選手となる。

(2) 練習の中心を打撃力の向上に当てる

易しい球を打てるようになってくれれば良く、難しい球は打てなくとも良い(対戦する相手の投手達を見れば、これによって10試合のうち6~7試合は、3~4点をとることができる私は踏んでいた)。したがって、守備は個人練習に任せる。なお、自分のタイミングで打っても長打を打てなければ、主軸打者となる資格はない。

(3) 各人がそれぞれの力を伸ばすことを主眼とした練習システムを採る

したがって、チームとしての練習は2時間程度とし、チームとして練習する必要があるものに限定する。後は各自の自主的な練習に委ねる。ただし、努力しても結果がでなければ、努力しないと同一ことである。どのように努力するかを良く考えて欲しい。

(4) チームワークのことは気にしなくても良い

各自がその役目を責任もって果たせるようになればよい。下級生に対して何も言う必要はなく、むしろその手本となるように心がけて欲しい。チームワークのためと称して行うことに意義のあるものは少なく、むしろ害となることの方が多いと考えていた。チームが強くなることを考え、試合ではチームが勝つことを考えて、それぞれの場面で最善のことができるのが、責任を果たすということである。

(5) 新入生は正式な部員としては扱わない

体力をつけ、かつ大学に慣れて、上級生と同様に、大学生活と練習が可能となるまでは、毎日練習に来る必要はないし、上級生と一緒に練習する必要もない。練習の手伝いとして、半分位が出てきて、体を慣らしていくのが適当であろう。レギュラーとは練習を別にして、下級生の時に自らの身になる十分な練習をする必要がある。特に、練習試合を多くして、試合勘のようなものを磨く必要がある。力がついて試合に出るようになって、初めて試合に慣れるということでは困るからである。

練習システム

新しいチームでの最初の練習はバッティングのみとした。ホームベース上に置いたTの上へのせたボ

ールを90メートル以上飛ばした者だけに打つ権利を与えた。初日には、この条件をクリアした選手は2～3人しかいなかった。翌日には2～3人増え、1週間後には、打つことができる者の数は10を越えるようになっていた。選手たちも、守るだけの練習は全く面白くないので、可能性のある選手達は必死になって挑戦していた。11月の練習はこれだけにした。シーズンオフの間に、バットスイングの力をつける必要性を痛感したはずである。

この間に、各人の走力と遠投力の計測をして、守備位置およびその役割を決める判断材料とした。選手達には守備位置の適正条件を明らかにしておいた。

- (1) 外野手は、足が速いことが必要条件であり、その上で打てる者を優先する。
- (2) 三塁手と一塁手は、長身であり、かつ打力に優れる者を優先する。
- (3) 二塁手と遊撃手は守備を優先する。遊撃手は強肩が条件である。
- (4) 1・2番打者は足が速いことが必要条件である。そして、2番打者は左打者が好ましい。3番打者も足が速いことが望まれる。なお、足の速い相川選手には、右打席のフォームを改造するよりもレギュラーとなるにはそちらの方が早道であると示唆して、左打席で打つことを勧めた。

春の練習は、全力で打つことを強制した。二人一組となり、一人が投げ、もう一人が打つ。緩い球を投げてそれを思い切り打つ。これを交代でやると、ひとり少なくとも100本位は打てる勘定になる。打つ数の制約は投げる方のスタミナにある。最初必ずしも皆は全力で打たなかった。それを無理やり全力で打たせたのである。これを続けていくと、タイミングを合わせることを覚え、力を入れるべきところと抜くべきところを体得できる。打つに必要な筋力もつく。良いフォームでなければ、打球は飛ばないので、打球が飛ぶか飛ばないかで、フォームが良いか悪いかを自分でも評価できる。緩い球を思いきり打つだけとし、守らないならば、何も硬球を使う必要はない。ソフトボールで十分である。けがをしない分、むしろその方が良い。検見川の広いグラウンドを使って、選手は三交代制で、練習した。一組はバッティング、一組はランニングと守備、そして一組は休息であった。

投手の生きた球を打つには、オープン戦を活用するしかない。わが軍の3人の投手では、いろいろな球を打つには不十分であった。最初のオープン戦では、緩い球の練習のみを行った後でも、結構打てたのである。緩い球を打っていると、タイミングは同じだから、カーブを打つのはそれほど難しくはない。打つのに必要な筋肉に力がついているので、速球にも案外と負けない。しかし、オープン戦を重ねていくと、段々と打てなくなっていく。打ち込みによる貯金がなくなり、逆に疲れが溜まってくることによって、バットの振りが鈍くなってきたのである。しかし、シーズン中も常に打つ数を多くするような練習システムを続けた。

守備については、易しい球を取る練習を主にした。試合では、捕れる球さえきっちり捕ってくれさえすれば良い。チームプレーもあまり、練習をしなかった。それは、オープン戦で学んでくれれば良いと考えていた。ただし、投手と野手との連携プレーについては、十分な時間をかけて練習した。このプレーは試合では必ず現れる上に、パターンとしてはシンプルであるので練習の効果が明瞭に試合に現れるからである。また、投手の守備については内野手と同じ努力が必要であることを強調した。

3人の投手には、オープン戦ではまず3インニングづつを責任もって投げさせることにした。順番を決めて、良くても悪くても3回を投げることを義務づけたのである。力があまりなくとも、3回で

あれば何とか投げられるものである。そして、ある程度力がついてきた段階で、2人で1試合を投げることに変えた。

このような練習システムをとったので、オープン戦でのプレー内容については、選手に何も言うことはなかった。言ってもできるレベルにないと判断していたからである。そして、そのままリーグ戦に臨んだ。

昭和47年の記録

ある程度力がついてきたと思ったが、それでもリーグ戦は春秋ともに全敗に終わった。これで、最上級生は、入学以来1勝60敗である。打撃に重点を置いた練習を行なったにもかかわらず、1試合平均、安打は、春 3.9 本、秋 4.7本 にすぎず(打率は1割3分と1割5分)、得点も、春 1.0、秋 0.9 (失点は7.6と6.5)というひどさであった。一方、三振は 春 8.4個、秋 6.9個の多さであった。思いきり振ることを奨励したので、三振には目をつぶることにしていた。正直、ランナーがいる時は、投手ゴロよりも三振の方がむしろありがたいのである。あまり練習をしなかった守備については、1試合平均失策数が、春 2.8、秋 2.0 であった。これらのデータを見ると、春よりは秋の方がすべて優れており、遅いながらも進歩は見られた。

春季リーグ戦

対慶大1回戦 (早川3回 御手洗6回)

慶大	0 0 5	2 2 6	1 0 0	1 6
東大	0 0 0	0 0 0	0 1 0	1

2回戦 (山本5回 早川3回)

東大	0 0 0	0 0 0	0 0 0	0
慶大	0 0 0	0 1 3	0 0 X	4

対法大

1回戦 (御手洗2回 1/3 早川4回 2/3 山本1回)

東大	0 0 0	0 0 0	0 0 0	0
法大	1 0 2	0 0 2	4 2 X	1 1

2回戦 (山本2回 1/3 早川4回 2/3 御手洗2回)

法大	1 0 3	1 0 0	2 2 0	9
東大	0 0 0	0 0 0	0 0 0	0

対早大1回戦 (御手洗8回)

東大	0 0 0	0 0 0	0 2 0	2
早大	0 2 0	2 0 4	0 0 X	8

2回戦 (早川6回 山本3回)

早大	2 0 0	1 1 2	0 1 0	7
東大	0 0 0	0 0 3	2 0 0	5

対立大1回戦 (早川4回 山本5回 2/3)

東大	0 0 0	0 0 0	0 1 0	0 1
立大	0 0 0	1 0 0	0 0 0	1 2

2回戦 (早川8回 2/3 山本 1/3)

立大	0 2 0	0 0 0	0 0 4	6
東大	0 1 0	0 0 0	0 0 0	1

対明大1回戦 (早川9回)

明大	0 0 0	0 0 0	0 0 3	3
東大	0 0 0	0 0 0	0 0 0	0

2回戦 (山本3回 1/3 早川0回 御手洗4回 2/3)

東大	0 0 0	0 0 0	0 0 0	0
明大	1 4 0	4 0 0	0 1 X	1 0

春季新人戦

1回戦 (御手洗8回山本3回)

法大	0 0 0	1 0 2	0 0 0	0 1 4
東大	0 0 0	0 0 0	0 3 0	0 2 5

準決勝戦 (御手洗8回)

東大	0 0 0	0 2 0	1 0 0	3
慶大	0 0 0	0 0 0	1 6 X	7

秋季リーグ戦の記録

対慶大1回戦 (御手洗6回山本3回) 慶大 000 000 311 5 東大 000 000 020 2	2回戦 (早川3回 1/3 山本4回 2/3) 東大 000 000 020 2 慶大 001 401 10X 7
対法大1回戦 (早川2/3 山本8回 1/3) 法大 500 100 322 13 東大 000 000 000 0	2回戦 (御手洗6回 山本 2/3 早川1回 1/3) 東大 001 000 010 2 法大 001 008 51X 15
対早大1回戦 (御手洗9回) 早大 100 020 001 4 東大 000 010 000 1	2回戦 (御手洗5回 山本3回) 東大 000 100 000 1 早大 000 131 20X 7X
対明大 1回戦 (御手洗6回 2/3 山本0回 早川2回 1/3) 明大 000 001 523 8 東大 100 000 000 1	2回戦 (早川8回 2/3) 東大 000 000 000 0 明大 000 000 001 1
対立大 1回戦 (御手洗5回 1/3 早川1回 2/3 山本1回) 東大 000 000 000 0 立大 000 200 00X 2	2回戦 (御手洗4回 早川4回 山本1回) 立大 100 100 010 3 東大 000 000 000 0

秋季新人戦

1回戦 (山本7回 御手洗2回) 東大 000 410 010 6 法大 000 100 000 1	準決勝戦 (御手洗9回) 立大 002 010 000 3 東大 010 000 000 1
---	---

1973年春

春の高知キャンプ

最上級生であった3年生が4年生となり、4年ぶりに4学年がそろった。3月初旬に私の郷里高知でキャンプをはった。それまでは行なつてこなかったことであるが、母校土佐高校籠尾監督や多くの先輩諸氏の援助によって実現したのである。温かい高知市営球場での練習であった。土佐高校時代の監督の溝淵さんも良く練習を見に来られ、バッティングの良いのには驚いておられた。この1年間の練習によって、少なくとも練習では良く打てるようになっていた。キャンプ終了後、四国内で5試合(四国銀行、伊予銀行、丸善石油、四国電力)、神戸で3試合(三菱重工、川崎製鉄、川崎重工)を行ったのち、帰京してさらに数試合のオープン戦をこなした。時には試合でも良く打てるようになってきた。投手も好投する試合が増えてきていた。

コーチの役目

監督2年目、春のオープン戦を通じて、私の考えを十分に選手に伝えることができた。そして、4

年生の一部の部員には試合に出ることを諦めてもらい、チームのために何らかの貢献をするように頼んだ。つらいことではあるが、彼等はそれを理解してくれた。大西乗史君は、連日、フリーバッティングの投手を勤めてくれた。シートノックは、坂谷内選手が引き受けてくれた。練習における監督の代理、試合におけるサードコーチもすべて彼の責任となった。

私はむしろコーチ役に徹し、試合で活躍すべき選手の個人指導をすることにした。相川三塁手と塩沢遊撃手の二人には、毎日のようにゴロの取り方やフットワークなどについて、付きっ切りで相手をした。そして、2年生の平尾選手のバッティングを徹底的に鍛えた。左打者である彼が右肘を伸ばしたまま左中間方向に打っていたのを、腕をたたんで右中間方向に打つように変更したのである。これによって、飛距離が格段に伸びた。これらはすべて、リーグ戦開幕時まで完了した。

オープン戦では、一つ一つのプレーに対して、細かく注意した。去年は、何も言わなかった。私の突然の変化に、選手達は最初戸惑った。しかし、すぐに慣れて、どんどん吸収していった。たとえば、走者一塁で相手がヒットエンドランを仕掛けてきたとき、二塁手が遊撃手のどちらかが二塁ベースに入るのであるが、塁に入った方に必ずと云って良いほど打たれていた。本人達はそれについて罪の意識がまったくなかった。捕手の出すサインにしたがってどちらが入るかを決めていたので、逆に打球がいくのは自分の責任ではないと思っていたらしい。いかなるサインが出ようとも、逆を衝かれたら、内野手の責任であることを私は強調した。投手の癖と打者の性質、アウトカウントとボールカウント、更には回数と得点差なども考慮に入れて、相手が打とうとするところに守るべきである。このような要求をできるレベルに漸く達していた。そして、春のリーグ戦に臨んだ。

バスの中

初戦の慶大には連敗した。続く明大1回戦も4対2の敗戦に終わった。監督になって23連敗したことになる。選手達は、一誠寮からバスで40分程かけて神宮球場に向かうのであるが、そのバスでの彼等の態度が私には理解できなかった。私が選手の頃は、行きのバスではその日の試合を控えて皆無口になり、負けた日の帰りのバスはお通夜のようなものであった。ところが、彼等は、行きのバスでは遠足に行くようにはしゃいでいるし、負けたのにもかかわらずこやかに話しながら帰るのである。何か理由があるはずだと良く考えてみた。そして、やっと彼等の心情が少しは理解できた。入学以来、既に63敗してわずかに1勝しかあげていない。負ける度に沈んでいては、とても練習をする元気など出ないのである。あえて明るく振る舞うのも彼等の努力ではなかったかと。このシーズン3勝した後は、神宮往復のバスの中は、予想通り、彼等も私達と同じような状態となったのである。

初勝利 -明大2回戦-

明大2回戦が監督としての初勝利となった。新聞記事を紹介したい。

オープン戦で2割8分の打者が4人と、本塁打が5本も出たと東大・岡村監督は、今季の打線に自信を持っていたが、この試合で期待通り猛打爆発、優勝を狙う明大を粉碎した。1回、明大土師の立ち上がり、喜多村四球、相川、平尾が連続長短打してわずか10球でKOした東大打線は、5回にも大沼、喜多村が連打した無死一・二塁で、相川が1-0後に積極的に打って出て、右翼スタンドに豪快な一発を打ちこみ、明大の氣勢をそいだ。当然送りバントとおもわれたが、よく思い切って打ったものだ。

左で俊足の2番打者相川にはバントをしないことを原則としていた。1回と5回の両方ともにバントのサインは出すつもりはないことを、本人はもとより、味方の選手は皆知っていたが、相手および記者には意外であったようだ。この投手陣で勝つためには、ひとつのチャンスで大量点を取ることが不可欠であると考えていたので、チームの最強打者に育った3番平尾にもバントをさせる気持ちは全くなかったのである。また、チャンスに必ず打つなんてことは期待していない。3～4度のチャンスを作り、その一度がものになれば良いと繰り返し話しておいた。プレッシャーをかけると、経験の浅い選手は、一般に結果が良くないからである。

明大は3回に土屋の二塁打を生かして1点返したあと、5回表、2四球と安打の1死満塁から押し出しで1点差と迫りながら、ここで救援した東大の3人目御手洗に、3・4番が三振、凡打にしとめられたのが致命傷となった。

これまで勝てる展開になったことは一度もなく、この試合が初めての勝つチャンスであった。この試合を勝つか勝たないかは、極めて重要である。私は投手交代時機だけに神経を集中していた。選手にとって、3年ぶりの勝利であった。

勝ち点 ー明大3回戦ー

東大は堂々と打ち勝った。これまで打ちあぐんでいた明大上田投手に対して東大は4回、安打の相川を一塁に置いて平尾が2-0のカウントから右翼席に本塁打を打ち込み先制した。5回には2死後から大沼、喜多村、相川が3連打して1点を加えた。早川投手も明大を四球の走者一人に押さえる好投を続けた。5回2死後、死球を与えてから早川は乱れ、今久留主に初安打を許し、続いて四球と満塁のピンチを残して山本と交代した。山本も四球を出し、押し出しの1点を許したが、御手洗の救援でこの回はきり抜けた。しかし、御手洗も6回、明大の上位打線のヒットエンドランと犠飛で1点差に詰め寄せられ、東大は危うくなった。8回、先頭の相川が二塁内野安打に出ると、東大はセキを切ったように打出し、国分、塩沢、河野が3連打して2点をあげ、6回から好投していた明大井上投手を崩した。残る2インニングを御手洗が力投して守り抜き、久々の勝点を握った。対明大戦を通じて光ったのは三投手の小刻みな継投。上位打線の積極的攻撃、3試合連続無失策の好守備だった。

前試合と全く同じパターンの勝ち方であった。選手に勝つ喜びを味わせるためには、私のミスは許されなかった。この試合も、最大のポイントである投手の交代時期のみに神経を使ったが、御手洗投手の好投を引き出した大沼捕手の功績は大きかったのである。

打ち勝つ ー対法大1回戦ー

スリリングな勝負を乗り切って東大は1点差で逃げ込んだ。この試合、東大は1回2安打するなど元気な出足を見せたが、1点の負担をはねかえした5回の反撃は鮮やかだった。この回、東大は2四球と相川の三塁線バントヒットで無死満塁の好機を作り上げた。平尾の適時打で同点とし、1死後、塩沢が右中間を抜く三塁打を放って走者を一掃した。

相川選手のセーフティーバントは彼の好判断であって、私のサインではなかった。塩沢選手は、大学に入学して正式に野球をやり始めた関係で、それまで試合ではカーブを安打したことがなかった。彼の練習を見ているとカーブを打つのは易しいはずであると思っていた。しかし、それまでカーブを打てなかったことは相手も意識しており、この時カーブを投げってくるのは誰が考えても明らかであった。カーブが来るとは言わずに、1球目を振れとだけ言って打席に送り出した。迷いを持たないで打席に立つことが重要であった。私は通常、選手にどうしろといったアドバイスはほとんどしなかった。ここは勝負どころである。しかもあまりにも効果が明瞭であったので、思わず口を出してしまった。そして、初球のカーブを振って、3点を取ってくれた。

しかし、後半東大の打線はややしめり、逆に法大がジリジリと御手洗投手を苦しめ、8回2死・二塁で代打中西が3点本塁打を左翼に打ちこんで、1点差にせまった。つづく代打原田も中前安打、新井も左翼線に二塁打を落としたが東大は、7-6-2の好中継で一塁走者を本塁寸前で押さえ、同点の危機を逃れた。9回、東大は法大4人目の投手中沢に、相川がこの試合4本目のヒットを浴びせ、二塁走者喜多村を迎え入れた。2点と差は開き東大もほっとしたが、その裏法大は2四球と山本の安打で無死満塁と佐々木の投手強襲安打で1点を返した。

ここで負けると思ったが、一応マウンドに行くと、御手洗投手は訴えるような眼をしていた。塩沢選手と同じケースである。私はこの試合、彼を代えるつもりはなかった。そこで、結果はどうなっても良いから、とにかく真中を狙って思い切り投げろとだけ言ってベンチに引き上げた。

ここで御手洗は、捕邪飛、遊ゴロ本封、投ゴロと後続三者を打ち取った。同投手は2回にも無死満塁のピンチに立つなど、法大にいま少し適時打が出れば危ない場面もかなりあったが、気力で投げ抜き、味方の好守好打に助けられて、今季初完投で18シーズンぶりに法大戦の勝利を勝ち取った。

昭和48年春の記録

結局このシーズン勝てるチャンスがあったのは、3試合にすぎなかった。その3試合をいずれも勝つことができたのは幸いであった。

春季リーグ戦

対慶大

1回戦 (早川 1/3 山本 3回 御手洗 5回 2/3)

慶大	1	3	0	5	1	0	0	0	0	10
東大	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

2回戦 (御手洗 6回 山本 2回)

東大	0	0	1	0	0	0	0	0	1	2
慶大	2	0	0	0	2	0	1	0	X	5

対明大 1回戦 (御手洗 7回 早川 1回)

東大	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
明大	0	1	1	0	0	0	2	0	X	4

2回戦 (早川 3回 山本 1回 1/3 御手洗 4回 2/3)

明大	0	0	1	0	1	1	0	0	0	3
東大	3	0	0	0	3	0	0	0	X	6

3回戦 (早川4回 2/3 山本0回 御手洗4回 1/3)

東大	000	210	020	5
明大	000	011	000	2

対早大

1回戦 (山本3回 2/3 早川0回 御手洗4回 1/3)

東大	000	110	000	2
早大	010	101	20X	5

2回戦 (山本2回 1/3 早川 2/3 御手洗6回)

早大	006	002	503	16
東大	000	002	001	3

対法大1回戦 (御手洗9回)

東大	001	050	001	7
法大	000	200	031	6

2回戦 (早川7回山本2回)

法大	100	000	100	2
東大	000	000	100	1

満員の東大応援団が総立ちとなり、肩を組み、校歌を歌った。7回の攻撃の時だ。2点リードされたこの回、2死から河野、代打鳩の連続安打で一・二塁とした。ベンチから岡村監督が出てきて、代打魚住を告げる。1球目ファール。2球目、魚住は打った。ゴツンというにぶい音。打球は二塁手山本の前にあがる小飛球になった。「あーあ」と応援席からため息が出た。だが捕球しようとした山本はその瞬間グラブで顔をおおう。打球が太陽の光の中にはいつ見えなくなったのだ。河野がかえって1点差。なおも二・三塁。「連勝」と声をからす応援団。だが、次打者大沼の一打は右飛となった。

3回戦 (御手洗2回 1/3 早川2回 山本3回 2/3)

東大	100	001	000	2
法大	321	140	00X	11

対立大1回戦 (早川7回 1/3 御手洗 2/3)

東大	000	000	000	0
立大	100	000	02X	3

2回戦 (早川5回 御手洗3回 山本1回)

立大	001	200	000	3
東大	000	000	001	1

春季新人戦

昭和48年春1回戦 (御手洗8回 山本3回)

立大	113	003	100	9
東大	000	000	002	2

野球部長梅村魁先生

私の尊敬する梅村魁先生が、国分先生の後任の野球部長であった。お忙しい毎日であるにもかかわらず、すべての試合にベンチに入って静かに見守っていて下さった。試合が終わると、話されることは、「今日はファイトがあった」か、「今日はファイトが足りなかった」のいずれかであった。後者の場合はかなり厳しい口調であった。相手に対して真剣に立ち向かっていったと感じられたときは、それが負けた試合であっても満足された。

1973年秋

早川・山本の好投 ー対慶大戦ー

昭和48年秋のシーズン最初の勝利は、対慶大1回戦、早川投手の完投によるものであった。1回に

挙げた3点を彼の好投で守りきったのである。

東大は投攻守のすべてが、うまく回転した。早川の好投を引き出したのは、1回の塩沢、渋沢のタイムリーであげた先制の3点。これをボックスが、しっかりと守った。東大は1回、小笠原を攻め、喜多村、平尾の安打で2死一・三塁。塩沢が右前安打して1点。河野死球で満塁のあと、渋沢が中前に打って3点となった。早川のピンチは3回2死満塁で、好打者山下を打席に迎えたとき。だが、早川は内角カーブでファールさせ、カウントを2-0と有利にしたあと、高目にボール気味の球を投げ、山下を中飛にうちとった。東大が慶大に勝ったのは、44年秋以来8シーズンぶり。

早川投手は、蒲池先輩から私が教えて頂いたことができるようになっていた。そのため、ストレートは伸び、コントロールも良くなっていた。カーブもより水平に鋭く曲がるようになって威力が増していたのである。

次の試合は、山本投手の完投勝利であった。連勝を異なる投手の完投によってなし遂げた例は、東大野球部史上でも珍しいことである。山本投手は、昨シーズンならばカーブを投げるところで、この試合ではスライダーを投げるようになっていた。これが相手の意表をつく結果となり、打たれなくなった主要原因であった。

記録を整理してみると、早川投手と山本投手の春から秋にかけての進歩が明瞭に認められる。防御率は、早川が4.9から2.5へと半減し、山本も4.7から3.2へと大きく改善している。1試合あたりの被安打も、早川は7.8から6.4に、山本は14から7.8へと大幅の改善。与四球についても、早川は5.5から4.4へ、山本は8.2から2.5へと大きく減少しているのである。両者ともに、コントロールが良くなり、球威も増していたのである。

東大は猛打を爆発させて快勝した。2回トップの国分が四球で出ると当たり屋塩沢が右中間に三塁打して先取点をあげ、河野の中堅犠牲フライで慶大の先発竹花からアッという間に点をもぎ取った。調子の波に乗る東大は、5回2死三塁に相川の右前打で1点を加え、7回にも渋沢の左越え二塁打を得点に結びつけ、勝利への安全圏に入った。東大の元気鋭刺の攻撃にすっかり威圧されたのが慶大。さほどスピードのない東大山本にてこずり、7回まで走者を出したのは1四球、2安打の3人どまりで、二塁を奪ったのは、盗塁した後藤だけという貧攻。ようやく8回、左中間二塁打した木原に続き、2死後小笠原が奮起の右越えホームーして2点を返し、上位打線に期待をつないだ最終回は、無死一塁の好機をつかんだものの、主砲山下が二塁へ併殺打して反撃の芽をつぶし万事休した。

塩沢選手は、カーブをむしろ好むようになっていた。

選手達の戦い - 対法大3連戦 -

この試合が終了すると、直ちに羽田空港に向かった。国分先生のお供をして、ロンドンで開催されるヨーロッパコンクリート委員会の総会に出席するためであった。法大戦は選手達だけで戦うことになった。このようになっても困らないように、オープン戦の数試合は私なしで戦っていた。ロンドンのホテルに電報が届いた。法大1回戦に3対2で勝った知らせであった。翌日には3対1での惜敗の

知らせが届いた。そして、最後に、また3対2の結果が入った。しかし、この試合が勝ったのか負けたのかが良く分からない電文であった。翌日には負けたことが判明し、がっかりとしたことを今でも鮮明に記憶している。

1回戦は、早川投手の完投勝利であった。そして、2回戦は、山本投手が10回まで投げて1対1、その後を早川投手が継いで、13回表に2点を取られる惜敗であった。スコアブックをみて、一つだけ私とは異なる采配があった。9回裏の2死一・二塁で、打者河野選手のところで、4年生の高橋選手を代打に送っていたことである。私ならばそのまま打たせたはずである。レギュラーを後輩に奪われた同級生に、花を持たせたかった気持ちは分からないでもない。それ以外は、3試合とも私が采配を振るったと全く同じであった。私の考えをここまで理解してくれていたかと改めて嬉しく思った。3回戦も早川投手の完投であった。5回表に1点をとって、一度は2対1とリードしたが、その裏2点を奪われての惜敗であった。2回戦の評は以下のようなものであった。

東大は惜しくも連勝を逃した。13回表、法大は安打の前村をバントと一塁ゴロで三塁に進めた。東大早川投手は佐々木を敬遠、当たって手いない山本と勝負して遊撃後方のフライに仕留めた。ところが遊撃手が深追いして最後は左翼手譲り合った形で打球は両者の間に落ちる安打となった。1-1の均衡は破れ、このあと秋葉の右翼線2塁打で法大は1点を加えて東大を突き放した。東大は2回2死一・二塁で大須賀に打たれ1点を先取されたが、6回2死から喜多村が安打、二盗、相川の一・二塁間安打で同点として食い下がった。しかし、1回戦の失敗にこりて、丹念に投げ込む前村投手から、延長後1安打しか奪えぬまま、13回に崩れ、24年秋以来の4連勝という快記録を逸した。

3位を逃す 一対立大3回戦一

対立大1回戦も早川の完投勝利であった。1対1の同点の7回表、打席に向かう河野選手にインコースの高目だけを狙えと指示した。この日の相手投手の出来から判断すると、彼が打てるとすれば、その球だけであることが私にははっきりしていたからである。彼に対する試合中のアドバイスはこれが初めてであった。その1球目に、なんとレフトオーバーの本塁打である。ホームインした彼に、どんな球かと聞くと、嬉しそうにインハイでしたとの返事。この一撃と早川投手の好投によって、この試合を2対1で勝利した。「東大の2回の先取点は、1死から河野が遊撃内野安打、渋谷がバントで送った2死二塁に、投手早川が右前に適時打した。1死から、バントで走者を進めた東大ベンチの策がまんまと当たった」私もたまにはバントのサインを出すことがある。

対立大2回戦は、1回裏に4点を先取した。1死後、相川、平尾の連打と四球で満塁と攻め、塩沢の犠飛でまず1点、さらに河野も投手強襲安打で再び満塁とすると、渋谷が左中間に二塁打を放って走者を一掃したのである。この試合に勝てば、接戦のこのシーズンは3位になることが分かっていた。先発の山本も好調であり、普通にいけば勝つはずの試合であった。選手もそう思ったようである。特に、下級生がベンチの後ろのほうで、浮ついた形でがやがやと煩くなった。この試合に勝ったあとの話などをしていた。それに気付いて、なんともいえない気分になった。それまでの試合で勝てる可能性のある試合は、すべて勝ってきた。選手の活躍によることはもちろんであるが、私の果たした役割もかなり大きかったはずである。この程度の選手達が、このような気分でも珍らしい3位になることが果たして彼らの将来にとって良いことなのか、疑問にさえ感じたのである。

そこで、この試合、私は何もしないことにした。それでも勝つならば、彼ら本来の力である。私にも文句はない。この試合を見ていた先輩、特に渡辺元監督は、この日の3回以降の私がまったく何もしないのを不思議に感じたという。さすがである。試合は、淡々と進み、立大に5回2死一・二塁から三塁打が出て、2点差となった。そして、8回1点を失い、なお1死一・三塁となったところで、たまりかねて坂谷内君が早川投手に代えて欲しいと言ってきた。もちろん、このようなことは初めてである。本当に力があれば、今日山本投手で負けても、明日は早川投手で勝てるはずである。何もこのような場面で、早川投手を登板させる必要はない。彼を今出すくらいなら、もっと早い回に出すべきである。しかし、この日は、私は何もしないと決めたので、逆らわずに、早川投手への交代に同意した。ここで、スクイズを決められて、同点とされる。相手の監督であれば、私もスクイズをするところである。延長10回には、早川投手が2点本塁打を打たれて、決勝戦を迎えることになった。

最後の試合も選手の納得する早川投手を先発させた。この試合に勝つてこそ、3位となる価値がある。しかし、早川投手に、もはや体力も気力も残っていなかった。前日の登板で、最後に惜敗したことが、疲労を大きくしていたと思われる。結局この試合を5対2で落とし、最下位に甘んじることになった。勝った立大は、久しぶりの3位となった。その時は、これでやむを得ないと思っていた。今の時点で冷静に考えてみると、2回戦をきっちり勝つか、その試合は山本投手に任せるべきであったと思うようになった。私も年をとったものである。

昭和48年の記録

この1年間の成績はある程度満足のいくものであった。春は3勝9敗、秋は4勝8敗、いずれも勝ち点1を挙げることができた。卒業生は、入学以来通算8勝77敗となった。打撃重点の練習成果がようやく現れ、1試合平均、安打は春7.1本、秋5.5本に増え、(打率は2割2分と1割7分)、得点も、春2.4、秋2.3(失点は7.6と6.5)と倍増した。昨年は1本もなかった本塁打も、春は2本、秋は3本であったが、左に転向した相川の1本を除くと、いずれも下級生達が打ったものである。このことは、最初に身についた打方を変えることは極めて難しいことを示している。一方、1試合当たりの平均失点は、春は5.8と多かったが、秋は4.0に大きく減少した。守備については、短い練習ではあったが、坂谷内のノックによって、常に緊張した雰囲気は保たれ、スローイングエラーもほとんどなくなったのである。そのため、1試合平均失策数が、春0.6、秋0.9と1個以下に収まり、春は2位、秋は3位の守備率であった。監督が明確な目標を掲げると、たとえ、それが難しいものであっても、選手達はそれを達成してくれることを経験させてもらった私にとって貴重な2年間であった。

昭和48年秋の記録

秋季リーグ戦

対早大1回戦 (早川3回 山本6回)					2回戦 (御手洗5回 2/3 早川1回 1/3 山本1回)				
早大	002	101	010	5	東大	100	000	030	4
東大	000	000	200	2	早大	001	005	01X	7

対明大1回戦(御手洗 1/3 早川7回 2/3)	2回戦(山本4回 2/3 御手洗3回 1/3 早川1回)
東大 000 000 000 0	明大 100 030 040 8
明大 310 000 10X 5	東大 000 000 000 0

対慶大1回戦(早川9回)

慶大 000 100 000 1
東大 300 000 00X 3

2回戦(山本9回)

東大 020 010 100 4
慶大 000 000 020 2

対法大1回戦(早川9回)

東大 100 000 020 3
法大 000 000 101 2

2回戦(山本10回 早川3回)

法大 010 000 000 000 2 3
東大 000 001 000 000 0 1

3回戦(早川8回)

東大 000 110 000 2
法大 010 020 00X 3

対立大1回戦(早川9回)

東大 010 000 100 2
立大 010 000 000 1

2回戦(山本7回 1/3早川2回 2/3)

立大 000 020 020 2 6
東大 400 000 000 0 4

3回戦(早川7回 山本1回)

東大 000 000 200 2
立大 100 103 00X 5

秋季新人戦

昭和48年秋1回戦(馬場3回松田6回)

立大 000 220 001 5
東大 000 000 100 1

2年間の投手戦績 -昭和47~48年-

昭和47年春季リーグ戦

	試合	勝利	敗北	打者数	回数	安打	四球	三振	失点	自責点	防御率
早川	9	0	4	193	43	49	20	11	33	20	4.19
山本	7	0	4	95	21	23	14	3	18	14	6.00
御手洗	5	0	2	118	23	32	18	12	25	17	6.65
合計		0	10		86	104	52	26	76	51	5.34

昭和47年秋季リーグ戦

	試合	勝利	敗北	打者数	回数	安打	四球	三振	失点	自責点	防御率
早川	7	0	3	99	22	22	11	11	15	13	5.32
山本	8	0	0	118	22	36	17	4	20	17	6.95
御手洗	7	0	7	182	42	37	22	15	30	22	4.71
合計		0	10		86	95	50	30	65	52	5.44

昭和48年春季リーグ戦

	試合	勝利	敗北	打者数	回数	安打	四球	三振	失点	自責点	防御率
早川	10	0	4	135	31	27	19	7	17	17	4.94
山本	9	0	1	81	19	23	13	5	14	10	4.74
御手洗	11	3	4	252	53	65	34	16	40	34	5.57
合計		3	9	103	115	66	28	71	61	61	5.33

昭和48年秋季リーグ戦

	試合	勝利	敗北	打者数	回数	安打	四球	三振	失点	自責点	防御率
早川	11	3	5	245	60 2/3	43	24	20	20	17	2.51
山本	7	1	1	154	39	34	11	10	15	14	3.23
御手洗	3	0	2	51	9 1/3	15	1	11	13	12	11.61
合計		4	8	109	92	36	41	48	48	43	3.57

相川殊勲の3ラン

東大 6-3 明大

対戦相手	1	2	3	4	5	6	7	8	9	合計	失点
早川	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
山本	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
御手洗	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
明大	0	0	1	0	1	0	1	1	0	3	0
東大	3	0	0	0	0	3	0	0	0	6	3

六大学野球

法大もやっと雪辱

今度は平尾が2ラン

東大 5-2 明大

対戦相手	1	2	3	4	5	6	7	8	9	合計	失点
早川	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
山本	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
御手洗	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
明大	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
東大	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

東京六大学

対明大戦2連勝 (昭和48年春季リーグ戦 P61~62 参照)

この時の勝ちパターンが一発長打による逃げ切り